

東京横浜独逸学園の幼稚園教育

— 幼小連携を中心に —

井本美穂

(本講座大学院博士課程前期修了／広島大学保健管理センター契約職員)

Kindergarten Education in Deutsche Schule Tokyo Yokohama: With a Focus on the Cooperation between Kindergarten and Elementary School

Miho IMOTO

Abstract

The purpose of this study is to clarify the practice of kindergarten education and the cooperation between kindergarten and elementary school of Deutsche Schule Tokyo Yokohama. Deutsche Schule Tokyo Yokohama is a German school in Japan, it has from kindergarten to high school at one location and they place importance on the cooperation between kindergarten and elementary school. The practice was examined by focusing on their music education. As a result, the school has the following suggestive points: 1. the kindergarten has lessons which are given by elementary school teachers; 2. game elements are introduced in the transition process from kindergarten to elementary school learning system; 3. music plays an important role as a means of language learning; 4. physical movements are incorporated in music activities. A clue to consider how the effective cooperation between kindergarten and elementary school could be is given by this study.

I はじめに

本研究は、在日ドイツ学校である東京横浜独逸学園の幼稚園および小学校の視察をとおして、幼稚園教育および小学校との連携のありかたを検討する手がかりを掴むことを目的とする。

東京横浜独逸学園は、幼稚園から高校までの教育機関を備えた在日ドイツ学校である。本学園ではドイツの指導要領に基づいて教育が行われており、授業は基本的にドイツ語で行われる。現在日本で唯一、ドイツの高校の卒業資格および大学入学資格を取得できる学校である。ドイツは東西統一後、社会情勢が大きく変化したことにより、学校教育全般の改革課題が就学前教育にも波及し、連邦をあげて幼稚園教育の質の見直しが行われてきた(豊田, 2011, pp.30-32)。こうした動向の中で、幼稚園を教育の場として位置づけ、その質の向上を目指す意識が高まっている。この動きに伴い、就学前教育から小学校への移行の円滑化を目指した取り組みが進められている。東京横浜独逸学園でも幼小連携に力を入れており、小学校の教師が幼稚園の子どもに対して授業を行うなどの活動が行われている。東京横浜独逸学園での幼稚園教育の内容および幼小連携の実践について知ることは、幼小連携の試みが現在進行中である我が国の幼稚園教育の方向性を検討する手がかりとなるのではないかと考える。本稿では、東京横浜独逸学園の幼稚園、および小学校にあたる初等科の中で音楽の授業に焦点をあて、幼稚園教育および幼小連携の実践の諸相を明らかにすることを研究の目的とする。

II 研究方法

2012年11月27日から30日までの4日間、東京横浜独逸学園の視察を行った。その際の観察記録お

よび教員へのインタビューをもとに、学園が基盤としているドイツチューリンゲン州の教育要領における「音楽」の領域との結びつきを踏まえながら、検討を行った。

III 東京横浜独逸学園

III-1 沿革

東京横浜独逸学園 (Deutsche Schule Tokyo Yokohama) は、東アジアに現存する在外ドイツ学校の中で最も古い学校である。1904年(明治37年)9月4日、横浜の民家を校舎として開設された。当初は生徒9人と教師2人であった。幼稚園は1912年に開園され、児童12人と教師1人で始められた。その後移転や火事による校舎の焼失を経験する。第一次世界大戦ではドイツが敗北し、ベルサイユ条約により設備が没収されたため、暫定的に総領事の家で授業を行なった時期もあった。1923年1月に新しく建築した家に移転するが同年9月には関東大震災が起こる。震災による建物の損傷は少なかったものの、ドイツ人家族の多数が横浜を離れたため、学校は一時的に閉校となった。その後JR大森駅に近い場所で学校を再開するが、再び火事により焼失、第二次世界大戦中は疎開も経験する。1946年にはアメリカ軍の指令により、閉校となった。1953年9月に「在東京ドイツ学校協会」が再び設立され、この年の12月1日、17名の生徒と共に、第2次世界大戦後初めての授業が始まった。1960年には最初の高校卒業生が卒業証書を手にした。1967年11月23日に東京の大森の新築校舎に移った。1970年以降は、ドイツと日本の関係が強まるにつれ生徒数が急激に増加し、東京大森校舎では収まりきらなくなったため、1991年9月に横浜市都筑区茅ヶ崎南に移転し、450人の生徒で新たなスタートを切り、現在に至る(Deutsche Schule Tokyo Yokohama, 2005)。学校の運営は、主に学費でまかなわれているが、ドイツ政府が財政支援と教員の派遣を行い、経費のおよそ3分の1を負担する。スイス人教員は、スイス連邦文化省およびスイス企業の支援を受けている。また、寄付者やドイツ企業などのスポンサーの支援も受けている。音楽に関する事項では、1961年にピアニストのヴィルヘルム・ケンプが来校し、新しく学校に導入したピアノで演奏会を行っている。また1979年にはヘルベルト・フォン・カラヤンが訪れている。



III-2 教育体制

学園には、幼稚園(3歳~6歳)、初等科(日本の小学校1~4年生に相当する)¹⁾、オリエンテーション段階(日本の小学校5年生に相当する)、中・高等科(ギムナジウム、実科学校、基幹学校、のいずれかに5年生終了ごろに進路が分かれる)の課程が設置されている。入学条件としてドイツ語が母語レベルであることが必要である。現在、首都圏に住むドイツ、スイス、オーストリアの子どもや、ドイツからの日本人帰国子女、国際結婚の家庭の子どもなど世界各国の子どもたち約340人が学んでいる。カリキュラムはドイツ本国の教育課程に基づいており、試験に合格すれば、アビトゥーア(高等学校卒業および大学入学資格)や、実科学校、基幹学校の修了資格を取得することができる。また、同校卒業生は日本の文部科学省に高等学校卒業相当として認められており、卒業生には日本の大学入学の道も開かれている(東京横浜独逸学園 HP, <http://www.dsty.ac.jp/schule/japanisch>)。

III-3 幼稚園教育

ドイツの幼稚園(Kindergarten: 3歳以上就学前児対象)は、保育所(Krippe: 0歳から3歳未満児対象)や学童保育(Hort: 基礎学校1年生から14歳児未満児対象)と並んで、制度上は福祉施設であり児童通所施設(Kindertageseinrichtung)として定められている(豊田2011, p. 30)。地方分権政策型のドイツでは、州ごとに教育要領の内容が定められているが、ドイツ16州のうち6州は、所管官庁が福祉機関ではなく、教育関連機関となっている(齋藤2011, p. 56)。これらの州では、幼稚園と日本の小学校4年生までに相当する基礎学校(Grundschule)との連携も推進されている。東京横浜独逸学園では現在、

チューリンゲン州の教育要領を基盤として教育が行われている。チューリンゲン州は上に挙げた6州に入り、教育科学文化省の所管となっており、幼稚園と基礎学校との連携に力を入れている（Thüringer Ministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur, 2010a）。そこで次項ではまず、チューリンゲン州の教育要領を概観したい。

III-4 チューリンゲン州の教育要領

チューリンゲン州では現在、幼児期から10歳までを対象とした教育要領（Thüringer Bildungsplan für Kinder bis 10 Jahre, 2010b）を用いており、教育領域を以下の7領域に分けている。

表1 チューリンゲン州の教育要領における領域

- ・言語学習
- ・運動教育と健康教育
- ・自然科学・技術教育
- ・算数教育
- ・音楽教育
- ・芸術と創造教育
- ・社会教育・道徳教育・宗教教育

各領域における学習段階は、段階1（basale）、段階2（elementare）、段階3（primare）の3段階に分けられているが、各段階に該当する年齢については定められていない。子どもによって発達段階に差があるため年齢を固定していない旨が記述されている。教師には、それぞれの子どもがどの段階であるかを把握し、個々に応じた教育内容を工夫することが求められている。年齢を規定しないことで、幼稚園と小学校との境界線がはっきりとひかれることがなく、柔軟な教育を行えるのではないかと考えられる。一方、教師に対しては、柔軟な教育力が試されるといえる。

音楽教育の領域では、子どもの音楽的な発達の程度と音楽活動の例が、段階ごとに記載されている。

段階1では、人の声や音、音楽を聴いて、高低・大小・長短・規則性の有無を認識する。

段階2では、人の声や音、音楽に対して、模倣することができるようになる。リズムやメロディーを記憶し再現することができる。強弱、速さを認識できる。

段階3では、自分の感情や経験を表現する手段として、音楽を用いることができる。

特徴として注目されるのは、音楽活動において、動きが大きな役割を担っている点である。リズムにあわせて体を動かす、ダンスと組み合わせるなど、すべての段階をとおして、音楽と動きを関連づけた活動が重要であることが記載されている。また記譜法の学習については、絵や図形など、様々な素材を用いた表現方法を学ぶことが示されている。さらに、生演奏のみでなく、CDやDVDなどを活用して教育を行うことが奨励されている。

III-5 東京横浜独逸学園幼稚園

III-5-1 幼稚園のコンセプト

横浜独逸学園幼稚園では、「幼稚園は教育の場である」と捉え、「子どもたちは幼稚園の最年少から学童年齢になるまでに、自分自身および世界についてどんどん学んでいく。学園では、子どもたちが生活の中で自分のやり方を見つける手助けとなる技術を磨くことに力を注ぐ」としている（東京横浜独逸学園HP, <http://www.dsty.ac.jp/schule/japanisch>）。また、できるだけ一人一人の子どもの成長に合うような保育指導を行うことで、子どもたちが自分の能力に自信を持ち、社会性や自己責任の力が育つとしている。

重点がおかれている領域は、表2に示すとおりである。

表2 東京横浜独逸学園幼稚園の重点領域

- ・動き
- ・科学的、技術的活動
- ・視覚芸術
- ・言語分野の促進

また、初等科との連携をしっかりとって教育を行うこと、および言語能力の発達に力を注ぐことが強調されている。在外ドイツ幼稚園として将来的にドイツ語を使用する子どもの比率が高いため、特にドイツ語能力の向上に重点が置かれている。

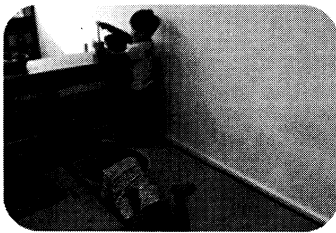
III-5-2 幼稚園の1日

幼稚園は、日本の縦割り保育にあたる3～6歳の混合学級で、4つのグループに分かれていた。各グループの人数については、12人ずつが3グループ、残り1グループは19人であった。19人のグループのみ教師2人体制であった。

本稿では、11月28日（水）に視察した「くま」グループの一日を例として検討する。このグループは、3～5歳の園児からなる12人のグループである。教師は園長のMs. Sabine Lucasであった。

8:30 登園後、それぞれ好きな遊びをする

部屋の中には、主に3つの遊びのスペースがある。「ゲーム」「作る」「ロールプレイ（日本ではごっこ遊びにあたる）」のスペースである。ゲームのスペースにはパズルや様々なゲームが準備してある。「作る」スペースには積み木、ブロック、自然の石など、自分で工夫して作る道具が置いてある。ロールプレイのスペースには、ままごと用のキッチンと食卓が用意され、くまの着ぐるみやエプロンも置いてあった。朝はそれぞれ自分の好きな遊びをする。



「ゲーム」のスペース



「作る」スペース



「ロールプレイ」のスペース

8:55 遊んでいたもののかたづけ

9:00 全員での活動（約50分間）

この時間が唯一、教師の指導のもとで全員がそろって同じ活動をする時間であった。各自椅子をもってきて円になる。以下1～4は日課として毎日行っているとのことであった。

1. 数字の勉強：椅子から立ち上がり、円になっている人数を数える。何人かにあて、ドイツ語、日本語、英語で人数を数える。
2. 歌で出席をとる：順番に、メロディーにのせて名前を言う。
3. 体の部分に関する言葉を習得：体の部分を歌詞にした歌をうたう。体の部分に関する言葉を、歌にして覚える。
4. 今日の日にちを確認：カレンダーを見て、「11月28日水曜日」であることを、ひとりの子どもにあてて答えさせる。その後全員で日にちを言う。
5. 質問と答えの練習：全員シューズを脱いで円の中央に置き、大きな布で覆って見えなくする。子どもは布の中を見ずに手で探って、靴をひとつとる。その靴の持ち主と思われる子どもの前に立ち「それはあなたのシューズですか」と質問しながら渡す。あてれば「はい、これはわたしのシューズです」といって受け取る。違っていたら「いいえ、これはわたしのシューズではありません」という。受け取った子どもがまたシューズをひとつとって同じようにする。靴を用いることで、全員が両足分2回ずつ体験することができる。ただ練習するだけでなく、実践することでより身につく。また教師が「まだ靴がない人は？」と問いかけると、「○○ちゃんがまだないよ」「○○くんはもうやったよ」などと答え、観察力と記憶

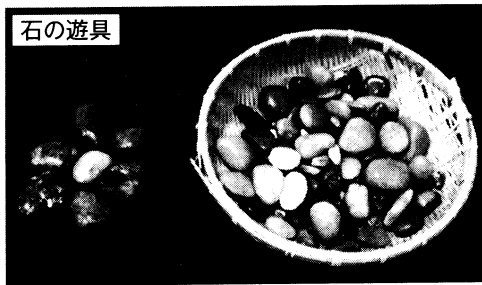


力も育まれている様子が伺えた。

6. 歌：覚えた歌を、教師が演奏するギター伴奏でうたう。この日うたったのは、クリスマスのイベントで歌う「O Tannenbaum」（ドイツ語）、「Das Lied uber Mich!」（ドイツ語）、「あわてんぼうのサンタクロース」（日本語）であった。
7. 上と下の勉強：ブロックをどちらかの手にとって、ゲーにしてかくす。質問する子どもを自分で選び、その子の前まで行き、ゲーにした両手を上下に交互に動かしながら、ストップしたところで「上？それとも下？」と聞く。答えて当たったら、当たった子どもにブロックを渡す。当たらなければ当たるまでやる。ブロックを受け取った子どもは、別の子どもに同じようにする。全員にあたるまでやる。
8. 手をつないで終了。

9：50 自由な時間：部屋の中で好きな遊びをする

色々なスペースに行き、好きな遊びをする。教師は様子を見守るが、時々指導も行う。ある子どもはロールプレイの場所で、エプロンをつけて、ままごとはじめた。他の子どもはくまの着ぐるみを着て、鬼ごっこをはじめた。ゲームをする子ども、パズルをする子どもなど、自由に分かれている。園長によると、この



石の遊具

時間は社会性、コミュニケーションはぐくむ重要な時間であるとのことであった。石の遊具は、様々な大きさや色の自然の石を集めたものである。子どもは、自分で工夫しながら形をつくって遊ぶ。積み木をはじめた子どももいる。色と形を組み合わせ、完成するとツリーになる。ある子どもがツリーの積み木を途中でやめて他のところに行こうとしたとき、教師が「最後までやってから行きなさい」と指導していた。「1つのことを終わらせることを学ぶ」ことを教えたとのことであった。また、

ゲームのスペースで、2人の子どもが近くでそれぞれ違うゲームをしていた際、1人の子どもが歌をうたい、それに呼応してもう1人が続けて歌うという場面があった。一緒にうたうのではなく、一人がうたう歌にに応じて、かけ合いのようにうたっており、音楽を通して個々のコミュニケーションが図られている様子が伺えた。

10：35 小学校との連携授業：

4グループすべての5、6歳児に対して、初等科の教師による授業が行われた（3、4歳児は他のグループの3、4歳児と一緒に引き続き部屋の中で遊ぶ）。5、6歳児は2列に並び、迎えにきた初等科の教師3名に付き添われて初等科へ移動する。廊下の踊り場で円になってすわる。歌をうたいながら、その場で伸びたりジャンプする。その後全員で1つの教室に入る。この日は「5」の数の数え方、書き方を学んだ。教師が黒板に「5」の数字をかき、5を題材とした絵をいくつか描く。視覚イメージを用いて、5という字と、数の概念との接合をはかる。次に書き順を確認する。「5」の書き順を学ぶ際に、「ピン、ポシ、パン」と、音を用いてリズムをつけて覚えていた。

その後3つの教室に分かれて入る。教師はそれぞれの教室に1人ずつ入る。この日は工作をした。画用紙に好きな絵をかき、絵にあわせてはさみで切る。別の画用紙で四角い家をつくり、のりで端を貼る。切った絵を自由に家に貼る。3本の毛糸を絡み合わせて三つ編みをつくり、作った家にセロテープで貼る。三つ編みの作り方については、丁寧に指導していた。幼稚園では自分用の机はなかったが、初等科ではそれぞれ自分に与えられた机で作業を行った。

11：20 5、6歳児は初等科から幼稚園に移動

11：30 全員外に出て遊ぶ。

フレッシュな空気を吸うことと、昼食の前に運動することで、落ち着いて昼食を食べられるようにするとのことであった。園庭の木の根元には、様々な色の石が置いてある。見つけた子どもが「宝物を発見した」という気持ちになるよう置いてあるとのことであった。ある子どもがそれらの石を拾って筆者に渡し

てくれた。すると別の子どもが、「持ってもいいけど持って帰ったらだめだよ」と言った。幼稚園でのみんなの共有の石だからだという。共通の宝物という意識が石にこめられていると感じた。

12:00 昼食

12:30～13:00 降園

13:10～14:40 ドイツ語が母語ではない子どもに対するドイツ語補修授業

混合学級であることから、自然と年長の子どもが年少の子どもの世話をしたり、みんなに順番がまわるよう配慮するなど、思いやりの心が育まれている様子が伺えた。初等科との連携授業については、数字の学習に音と絵を用い、遊び感覚で学習している点が印象的であった。算数、音楽、美術の領域を組み合わせた授業となっていた。

音楽については、言語の習得を目的に使用している場面が多かった。またその際には、動きと組み合わせられていた。教師によると、「歌やリズムにのせて体を動かすことで、様々な事柄を覚えることができるため」とのことであった。また、教室内が騒がしくなった時に、教師が静かにする時の歌を歌うと、教室が一瞬にして静寂に包まれた。音楽が規律に関する合図としても用いられていることが伺えた。

III-6 東京横浜独逸学園初等科低学年の音楽授業

それでは、小学校にあたる初等科ではどのような音楽授業が行われているのであろうか。初等科のうち、低学年の授業内容をとりあげ、幼稚園とのつながりについて検討する。

1年生

初等科の1年生は、幼稚園で使用していた教科書（Friedrich, 2010）を用いて授業を受けていた。この教科書は、自然や動物のイラストが多く用いられており、絵本のようになっている。

チャンツ：CDを用い、ドイツ語のアルファベットを、リズムにのせて覚える。

身体活動をともなった歌唱：部屋を暗くする。ランプを持って円になる。

「きらきら輝く小さな星」(Blinke, blinke kleiner Stern)の歌(ドイツ語)を流しながら、円になって歩く。4/4拍子の曲に対して、2拍子ごとに足を一步前を出し、進んでいく。慣れたら一步後ろに下がる動作も入れる。リズムを身体の動きで習得する工夫がうかがえた。リズムにのって動けるようになったら、CDを止めて円になったまま、歌をうたう(楽譜なし)。歩く練習の際に何回か聴いているので、メロディーはすでに覚えている。歌詞は教師の言葉を聞いて覚える。意味を確認しながら歌詞の内容を知る。立って通してうたう。CDにあわせて2回歌う。もう1回CDなしでうたう。

2年生

歌によるあいさつ：「おはよう、みんなが集まりました」とうたう。

リズムの練習：3種類のリズムをみんなで1回ずつ打つ。その後3つのグループに分かれて打つ。

板書は以下のとおりであった。

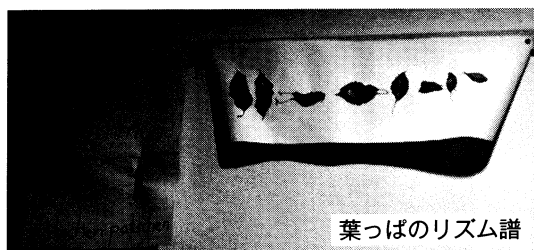
		1	+	2	+	3	+	4	+
グループ1	手拍子	x	x	x	x	x	x	x	x
グループ2	ひざ叩き		x		x		x		x
グループ3	机叩き	x		x		x		x	

歌唱：伴奏はなく、教師の歌声に合わせてうたう。「O Tannenbaum (もみの木)」ドイツ語3番まで、日本語1番、英語1番。その後「Silent night」を立てて1回歌う。「O Tannenbaum (もみの木)」は幼稚園でもドイツ語で歌われていたが、2年生では日本語と英語も加わっていた。

歌詞と楽譜の本を配り、CDに合わせてポップ調の「きらきら星」をうたう。

リズム練習の応用：廊下に移動し、廊下にはってある「葉っぱのリズム譜」を用いてリズムの練習をする。縦に葉っぱがはってあるときは手をたたき、横にはってあるときはひざをたたく。授業の始めに行っ

たリズム練習の応用ともいえる。リズム譜として、自然の木の葉を用いている点は、教育要領にある「様々な素材を用いた表現方法を学ぶ」活動につながっていると考えられる。



IV まとめ

本稿では、東京横浜独逸学園の幼稚園教育について、主に幼小連携および音楽の面に焦点をあて、その実践内容について検討した。

幼小連携については、次の点に示唆を得ることができると考える。

- ①子ども同士や教師同士の交流だけでなく、初等科（以下日本の呼び方にあわせて小学校とする）の教師が幼稚園児に対して授業を行う時間をもつ点。この取り組みは、園児にとっては、小学校の雰囲気慣れること、小学校の教師とのコミュニケーションをとることにより、小学校入学に対する心理的な準備ができるのではないと思われる。教師側にとっては、小学校入学前に園児とかかわることによって、それぞれの子どもの性格などを把握することができ、入学後に個々に応じた対応が可能になると考えられる。
- ②遊びの要素を取り入れながら、小学校の学習体制への移行準備を図る点。数字の学習に美術、音楽を取り入れるなど、科目の領域を超えて工夫が行われており、楽しみながら学習ができる点が有効であると考えられる。

音楽面については、幼稚園から小学校低学年にかけて、次の点が観察された。

- ①言語習得の手段として大きな役割を果たしている。これは、在外ドイツ学校として、言語能力の向上に力を入れている学園であるがゆえの特徴ともいえるかもしれないが、同じメロディーにのせて、ドイツ語、英語、日本語の歌詞で歌うことにより、様々な言語を習得しようと試みられていた。
- ②音楽活動の際には、あわせて体の動きも取り入れられていた。
- ③教材として幼稚園の教科書を小学校でも継続して使用していた。この点は、幼小教育の連続性を図るうえで有効であると考えられる。
- ④自然の素材をリズム練習に取り入れており、自然に対する感覚を高めるよう工夫されていた。またこうした方法は、五線譜のみでなく図形楽譜など、音楽を多様な形で表現する能力を高めることにもつながると考えられる。中学校と高等学校の音楽授業も視察をしたが、五線譜のみにとらわれず、聴覚とコードを用いて各自が自由に表現および即興活動をしている様子がかがえた。就学前教育や小学校教育の段階から多様な音楽表現に触れる取り組みの成果があらわれていると感じた。

今回は4日間という短期間の視察であったが、東京横浜独逸学園における幼稚園および小学校の音楽授業を観察することで、幼小連携の実践方法を検討する手がかりをつかむ貴重な体験となった。東京横浜独逸学園は少人数体制であり、また幼稚園と小学校が同じ校舎内にあるため交流が容易である。こうした環境であるからこそ可能となる授業内容もあると考えられる。その点も含め、今後はこの視察結果を手がかりに、幼稚園における、小学校との連携を視野に入れた系統的な音楽教育の方法について検討していきたい。

<謝辞>

視察を許可して下さった東京横浜独逸学園学長の Dr. Detlef Fechner, 幼稚園視察の際に色々な説明をして下さった幼稚園長の Ms. Sabine Lucas, その他授業を見学させていただいた先生方および生徒の皆さんに感謝を申し上げたい。

<注>

1) 東京横浜独逸学園の「初等科」と、本論文中で記述している「基礎学校」は、どちらもドイツ語の Grundshule のことであり、日本の小学校の1～4年生に相当する。

<引用・参考文献>

Deutsche Shule Tokyo Yokohama (2005). *Festschrift Deutsche Schule Tokyo Yokohama [1904-2005]*. Deutsche Shule Tokyo Yokohama.

Neumann, Friedrich (2010). *Duett Schülerbuch 1/2 für die Grundschule*. Stuttgart:Klett Ernst.

Thüringer Ministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur (2010a). Thüringer Gesetz über die Bildung, Erziehung und Betreuung von Kindern in Tageseinrichtungen und in Tagespflege als Ausführungsgesetz zum Achten Buch Sozialgesetzbuch- Kinder- und Jugendhilfe –Thüringer Kindertageseinrichtungsgesetz- ThürKitaG -vom 16. Dezember 2005, (GVBl. S. 365 - 371, 2006, S. 51), zuletzt geändert durch Artikel 1 des Gesetzes zur Änderung des Thüringer Kindertageseinrichtungsgesetzes und anderer Gesetze vom 4. Mai 2010 (GVBl. S. 105).

Thüringer Ministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur (2010b). Thüringer Bildungsplan für Kinder bis 10 Jahre.

齋藤順子 (2011) 「ドイツの保育制度—拡充の歩みと展望—」『レファレンス』2月号, pp. 29-62.

東京横浜独逸学園 HP, インターネット, <http://www.dsty.ac.jp/schule/japanisch> (2012/12/10 にアクセス).

豊田和子 (2011) 「ドイツの幼稚園における「教育の質」をめぐる議論と成果—Tietze ら (ベルリン自由大学研究グループ) を中心に—」『保育学研究』49 (3), pp. 269-280.